

『一握の塵』とブラジルへの旅

鈴木 繁 一

序

ウォーの『一握の塵』(A Handful of Dust)^①は、紳士トニー・ラーストの伝統的家庭生活が崩壊する物語と、さらに彼がブラジルの秘境で囚われの身になる話とからなっている。トニーは、芸術的価値のない擬似ゴシック様式の屋敷ヘットン・アビーで時代錯誤的な生活に浸りきっているが、落馬事故によって一人息子を失い、妻ブレンダが他の男にひかれ屋敷への夫の愛着を一顧だにしないと知ると、彼女が離婚を望むなら何の財産分与もせず離別するつもりだと宣言して、旅行に出かけてしまう。旧式の生活が現代的諸要素に侵蝕されていく中で、彼らの生活態度はそれぞれに盲目的であり、息子の死に出会ってさえ彼らは宗教と縁な

く過ぎてしまう。作品の三分の二を占めるこの家庭崩壊物語について、私は前に論じたことがある。^②

トニーは、ブラジルの奥地にあるという伝説の都 (the City) を、探険家メッシンジャー博士と共に捜しに出かけるが熱病にかかり、博士は滝に落ち、一方、ブレンダは貧窮し男に捨てられる。トニーが謔妄状態でたどりついたと思つた都は、秘境に住むトッド氏の住居であった。文盲のトッド氏はディケンズの作品の朗読をトニーに要求し、捜索隊が来ても彼に知らせず帰してしまい、トニーは遭難して死んだと伝えられ、親戚の一家がヘットンを経ぐ。

ウォーは、一九三二年十二月から翌年五月まで英領ギアナおよびブラジル奥地への旅に出かけ、一九三四年、その旅行記『九十二日間』(Ninety-Two Days)^③と小説『一握の

『一握の塵』を出版した。トニーの探険旅行はこのギアナ・ブラジル旅行の経験から描かれており、特に、トッド氏の着想が全作品を構想する発端になったことは、後に見るように、作者自身が述べていてよく知られている。このように、『一握の塵』制作の背景をうかがう資料は以前から知られているのであるが、近年ウォーの日記、書簡、ジャーナリズム文集などの刊行が進み、資料がより直接的かつ包括的に利用できるようになった。本稿では、主としてトニーの探険旅行の部分と関連するこれらの資料を見て、感じるところを述べたい。

1

ウォーが前回のアフリカ旅行からサウサンプトンに帰り着いたのは、一九三一年三月十日であった。彼はその旅行記『遠い国人』(Remote People)を夏頃仕上げ、ついで九月から『黒いいたずら』(Black Mischief)にとりかかり、翌三二年五月に書き上げた。その後、次の取材旅行の目標を模索していたのであろうが、同年十月と推定されているA・D・ピーターズあての手紙で、ギアナ、ヴェネズエラ方面の旅行記事の注文をとってほしいと依頼している。手はずが整い、十二月二日、彼は英領ギアナのジョージタウンへ

向かう船上の人となった。

ウォーはアフリカ旅行の終わり頃から二十一月余り日記を書かなかつたが、一九三二年十二月四日から再び記入し始めた。この日の日記に、出発前の日々、テレサ・ユングマン(Teresa Jungman)と何度も食事、散歩、ミサなどを共にしたことが見える。『イーヴリン・ウォーの日記』の編者マイケル・デイヴィーによれば、ウォーは彼女と結婚したいほどに思っていたが、離婚後カトリックに改宗していたため再婚できないと思っていたという^⑥。

トニー・ラーストはジョージタウンへの船中で、トリニダードへ帰るテレズ・ド・ヴィトレ(Thérèse de Vitre)と親密になる。彼女は島の良い家柄のカトリックの男性の誰かと結婚せねばならない。彼女は口癖のように「たやすいことなのよ」という言葉を繰り返し、トニーがカトリックになって島へ来てくれることを望むかのようなのである。そうなっていれば、彼は破滅を免かれたであろう。しかしトニーは、彼を独り者と思い込んでいた彼女を失望させてしまう。この挿話はテレサ・ユングマンとの関わりから生じたと思われる、ウォーは後に、この「感傷的なエピソード」は恐らくミステイクであると思うと述べている^⑦。そもそも、作者の離婚の事実と再婚の予見不可能性が、『一握の塵』

の創作そのものの基本的背景であることを否定する人はいないであろう。ロンドンを発つ時、ウォーは別れに気が減入った。船中でギアナについての本を読むと、奥地への旅は耐えられそうもないほど困難とも容易とも思われた(十二月四日の日記)。

十二月六日、沈んだ顔つきの若い男と前の晩に知り合ったことを日記に記している。彼は金を試掘しに行く技師で、インディアンとの混血^⑧であった。奥地について少しばかり知っていて、奥地への旅に役立ちたいと申し出た。両親は(ジョージタウンに近い)パーティカに木材工場を持っていくという。アンティグア、バルバドス、トリニダードなどの停泊地およびジョージタウンで、ウォーがウィリアムズ^⑨としばしば行動を共にしたことが日記に記されている。十二月二十二日、ジョージタウンに上陸した。

十二月二十六日(記入は一月一日)、ウォーはウィリアムズ家へお茶に招かれて行き、ロス博士(Dr. Roth)という頑固で不快な老人に会った。博士は、文明化されていないインディアンが見つつけられる唯一の場所であるエセキーボ川源流へ、ウォーが三〇〇ポンドの費用を負担するなら連れて行こうと言う。続く数日の間にこの申し出に非常に興味が行いてきて、面白い本が書けそうに思われた。しかし、ロ

スは無責任な旅行家で、時間と金の観念がなく、基本的な準備を怠るので奥地へ行くときまって死にそうな目に会うなどと人々から聞かされて、ウォーの熱意はざめたという。(一九三三年一月一日の日記)

ウィリアムズとロス博士に出会ったことは、小説中のメッセンジャー博士(Dr. Messenger)の着想のもとになったと思われる。ロンドンのクラブで旅行案内を見ていたトニーが、博士の眼にとまる。彼は禿頭であごひげを生やしているものの、非常に若いのはウィリアムズと同じである。彼はブラジル探険のための二〇〇ポンドを失ったところで、トニーをよいカモと見た(ロス博士もウォーをそう見たのであろう)のだが、トニーは彼の話に乗せられてしまう。メッセンジャー博士は秘境の都の伝説をトニーに伝えるメッセンジャーであるとともに、トニーが窮境(Mess)に陥る原因となり、自分もボートを操りそこなうというへま(Mess)をして溺れ死ぬ。彼は船中で役割がない時は眼り、役割を終えれば退場させられるのである。

結局ウォーは、エセキーボ川畔のクルプカリまで、そのあたりの地区弁務官ヘインズ氏に連れて行ってもらうことになった。一月二日と推定される両親あて手紙に、郵便局のない奥地へ旅に出るので当分便りができないが、心配し

ないでほしいと書いている。

二

一九三三年一月三日、いよいよジョージタウンを出発、同行はヘインズ氏と、ウォーの身の回りの世話をする黒人警官一人。海岸沿いに鉄道でニュー・アムステルダムまで走る。ヘインズ氏は旅行記ではベイン氏となっているが、彼の多弁なことにウォーは驚き、寡黙は文明からの距離と正確に反比例するようだ、自分の経験では、開けた広大な地域では人間ははなはだ多弁である、

彼らは、極めて個人的な思い出、見た夢、飲食物に消化、科学、歴史、道徳、神学論と、あらゆる事柄を語る。しかし中でも神学論を語る。神学論は、すべて孤独な人間をすぐ角を曲ったところで待ち受けている強迫観念であるようだ。貨物船の元氣な酒飲みの船長と狼談を始めても、十分後には彼は原罪の教義を証明するか否定するかしているのだ。^⑩

と書いている。

一月四日、バービス川を外輪船で溯りタカマ着。五日、

イギリス式とは大いに異なる馬の乗り方を教わり、もう一人黒人召使いを加え、陸路クルブカリへ向けて発つ。これからの旅はサバンナとブッシュの繰り返しである。ブッシュは一種のジャングルで、ゆったりした道の両側に一五〇フィートほどの高さの樹々の壁がある。地上から二〇フィートまでは密生した藪で、その上に建物の立柱のように樹々の幹が現われる。その頂上は葉が生い茂って屋根をなしていて、星のようにまばらに陽の光が見える。花や鸚鵡や猿が見られるのは一〇〇フィートも上なのである。^⑪このようなブッシュの経験は、当然ながら、小説の随所に生かされている。

一月十一日、クルブカリ着。ヘインズ氏の所有するポートの帰還を待って数日過ごしたが、その間にヘインズ氏は、国境の向こう、ブラジル奥地の町ポア・ヴィスタの夢をウォーに吹き込んだ。それはウォーの知らない町だったが、氏によれば、アマゾナス州で最も重要なマナオスに次ぐ町である。彼自身は行ったことがないものの、

歓楽あり暴力あり、革命が企まれ政治家が暗殺され、外輪船の定期便がマナオスとの間を往復している独特の魅力がある所で、大邸宅にいくつものオペラハウス、

大並木通りや噴水があり、拍車と白手袋の傲然たる軍人たちに、枢機卿、大富豪たちがいる、えもいわれず壮麗な町^⑧

だと言うので、ウォーは、ボア・ヴィスタとマナオスへ行く者は、全く幸運な人間だと思った。これが、メッシンジャー博士がトニーに吹き込んだ都の伝説のものであった。博士の中に、ヘインズ氏の存在も吸収されているのである。ただし、ウォーは現代的な快適さを求めたのに対し、トニーは 'a transfigured Helton' (理想化されたヘットン) を求めるといふ、当然ながら、重要な相違がある。

一月十五日、ヘインズ氏と別れ、クルプカリを一たん出発するが失敗して戻る。十六日、さらに一人の黒人とロバを加えて再出発。十八日、文明化されたマキューシ・インディアン^⑨の村に立ち寄る。小説にも出てくるインディアンである。十九日、英独開戦を知る。

一月二十日、クリステイ^⑩氏の住居に着く。この人物のことは旅行記に詳しい。密林と大草原を苦勞して進んで来て、sandpaper trees の蔭になっていたインディアン^⑪の小屋が突然眼に入った時はうれしかった。老年で宗教心が篤いと聞いていたクリステイ氏は、もじゃもじゃの白髪と

長い口ひげを生やした黒人の血の濃い人物である。見知らぬ人が近づくと、豚、ジャッカル、虎などの夢で予知する力があり、ウォーがやって来ることは「妙な音色のオルガン」として夢に現われたと言う。その晩、ウォーは酒を飲みながら、(ヘインズ氏以上に饒舌だったであろう) 彼から宗教観などを聞くことができた。

ウォーがクリステイ氏に会って、「彼はいとまたやすく私を囚えることができると思った」ことがもとなり、小説中のトッド氏が生まれたことはよく知られている。作者はトッド氏に、クリステイ氏に見られた訪問者を予知する能力や俗人福音宣伝者としての性格を与えず、インディアン^⑫の母を通じてインディアン^⑬の家父長としての性格を、そしてバルバドス出身のもと宣教師の父を通じて、いくばくかのイギリス的教養と宗教的関心を与えている。トッド氏は、「私は神のことをずいぶん考えたが、まだわからない……ディケンズは信じていたのだ」と言って、文盲でありながらディケンズの偏執的な愛好者であることを徐々にあらわにし、ディケンズの作品を朗読してくれるトニーを放そうとしない。このような結末を作者は、concoit (奇想) と呼んでいる。トッド氏もディケンズの作品も、トニーの宗教的無関心を衝いて彼に泣き面に蜂の思いをさせる

道具立てである。この作品で、作者は主人公の宗教的無關心を示し、宗教は無意味であろうかと問いかけていると感ぜられるが、それ以上の主張は控えている。

クリステイー氏の住居を翌日発ち、一月二十三日、ボン・サクセスに入り聖イグナチウス・ミッシェンに着く。このメイザー神父は、ギアナ植民地でもてなしてくれた人々の中で最も親切で、ウォーは何日も滞在し世話になった。ウォーは三人の黒人を解雇し、神父が案内人として貸してくれた牛飼いともう一人を供に、二月一日ミッシェンを出発、国境の川を渡り、四日、ブランコ川に至り対岸にボア・ヴィスタを望んだ。

三

クルプカリでヘインズ氏からボア・ヴィスタの夢を吹き込まれて以来、当初は何の意味もなかったこの町への期待は、ウォーの心の中で大きくふくらんでいた。メイザー神父の話こそ控えめだったが、他の誰からも、眼もくらむ魅力ある町であるとか、近代的で快適なものに満ちているとか聞かされた。「そこへの旅の辛さのあまり、私はボア・ヴィスタでの安逸な暮らしを待ち望み、今の辛さの数々は、実は、私を待っている楽しみを十分味わえるようにするた

めにちょうどよい苦勞なのだと思った。」

しかし実際に足を踏み入れてみると、ボア・ヴィスタは近代都市としての建設が放棄された町であった。ホテルもなく、泥を固めて造ったひびだらけの大通りを歩いて、丘の中腹にあるベネディクト修道院へ向かった。両側の家々は泥造りの平屋で、住民の眼は敵対的であった。諦めの表情で迎えてくれた修道僧によれば、マナオスへの船がやって来るのは数週間か数か月後なのであった。それでも、ガイドがもっと早い船の見込みを知らせてくれたものの、

すでに、そこに数時間いただけで、私の想像していたボア・ヴィスタは崩壊していた。消えてしまった。地震に飲み込まれ、大竜巻に根こそぎにされ、風に舞うもみ殻のように空高く放りあげられ、ゴモラのように硫黄で焼かれ、(中略)猛きトロイは落ちた。

この町へのウォーの期待は潮に浸された砂の城のように消えてしまい、町を詳しく見ても回復することはなかった。マナオスへ行く船を待ってなすすべもなく日を送るうちに、そこが刑期を終えた囚人の子孫の町であること、殺人が珍らしくないこと、罐詰工場を中核とする産業振興

と都市建設が企てられたが、失敗したことなどがわかってきた。

ボア・ヴィスタでの幻滅は、事件に乏しい今回の旅行記のクライマックスをなしていて、ウォーはこの町への期待を描いた時と同様の華麗な筆致で、ユーモアのうちに幻滅の効果を高めている。トニーがトッド氏の住居にたどりつく第五章末でも、作者は彼の都の幻想を華麗に描いている。しかしトニーは謔妄状態にあるので、そこでは幻滅は意識されない。彼の幻滅はむしろ第四章末、ヘットンゴシック世界が崩壊したところで表現されている。その言葉 'A whole Gothic world had come to grief' が、ボア・ヴィスタでの作者の幻滅を表わす言葉 'the Boa Vista of my imagination had come to grief' と似通っているのは注目される。

二月十日の日記でウォーは、「人間が駄目になりそうな退屈の四日間。フランス語の聖者伝とボッシュエの説教しか読むものがない」と嘆いている。その前日、彼はロス博士の庶子で鍛冶屋をしている青年に会い、青年はウォーが待っている船が着いたら知らせると約束してくれた。ところが船はその晩に着いたのに知らせはなく、ウォーがそのことを十日に知った時は、再び船が出る一時間前であった。

乗船は結局断わられた(二月十日の日記)。トッド氏のやり方を思わせるようなこの事件で、ウォーは退屈な本を読みながらいつまでもこの町から出られない自分を想像したかも知れない。この事件がきっかけになって、彼の胸のうちに創作衝動がうごめき始めたのではなからうか。十二日の日記に、「短篇小説のプロットを思いついた」ことが記されている。この短篇が、後にウォーが語った「ディケンズを愛した男」(The Man Who Liked Dickens)である。そして十四日の日記にこう記している。

短篇を書き上げた。ボートは明日着くはずだが、その出発あるいはマナオス着について確かな事はわからない。私はギアナへ戻り、カイエトゥールとバーティカを通してジョージタウンに帰ることにした。

マナオス行は放棄され、往路とは違う径をたどってジョージタウンへ帰ることになった。帰りの旅は極めて困難であった。二月十六日出発を試みたが失敗し、十七日にも失敗し、十八日ようやく出発、プランを変えながら進み、二十二日、聖イグナチウス・ミッシェンに着きしばらく滞在。ディケンズの『ドンビー父子』を読んでいること(二十七日)、

『マーティン・チャズルウィット』を借りたこと(三月四日)が日記に記されている。これらが短篇を書いた後であるのは興味を引く。三月五日ミッシェンを発ち、山岳地帯とジャングルを歩き、あるキャンプで十二日間休み、三十一日カイエトゥール着、四月五日、船でジョージタウンに向かった。日記記入はこの日までで、以後一年間余りとだえる。英国に帰り着いたのは五月初めだという。

四

「ディケンズを愛した男」は、一九三三年九月、英誌 *Nash's Magazine* 及び米誌 *Cosmopolitan* に掲載された。^② この短篇と『一握の塵』の関係については、作者自身が再三にわたって述べている。^③ その資料を総合すると、ウォーはブラジルへの旅行中に白人と黒人の混血の俗人福音宣伝者に泊めてもらい、「彼はいとまたやすく私を囚えることができる」と思ったのだが、その経験からポア・ヴィスタ滞在中に「ディケンズを愛した男」を書いた。その後、

そのアイデアは私の胸の中で活動し続けた。私は囚われ人がどうしてそこに至ったのか知りたく思った。そして結局、それは故国における別な種類の蛮人たち

と、彼らの中で文明人たる男が陥る救いようのない窮境の考察に発展した。^④

こうして短篇は、小説の「トッド家にて」の章になった。このように作者の言葉が残っているのは有難いが、それでも、故国でのトニーの窮境がなぜ家庭崩壊物語なのかは、クリスティー氏との出会いによって説明されるわけではない。なお、小説に組み入れるため、短篇がどのような変更を受けたかは興味ある問題である。

旅行記と小説の執筆状況を、『イーヴリン・ウォー書簡集』によって見ることにしよう。一九三三年十月(推定)、「私は三日間書いて書いて書きました」と、(編者注によれば)『九十二日間』について述べている(翌年三月出版)。一九三四年一月、モロッコのフェズから、

私は小説を書き始めました。よい出来です。はじめは *sponger* の話で、ついで、幸せな結婚生活を送っているが長くは続かない架空の人々の話になります。^⑤

と書いているのは明らかに『一握の塵』のことである。作品に現われる '*shameless blond*' と同じ表現の女性への

言及もある。‘Sponger’はブレндаがひかれるジョン・ビーヴァーであろうが、編者が実在の人物を注記しているのは、そのモデルという意味か。前年十月(推定)のすでに引いたのとは別の手紙^⑤で、「私はもうたかり(sponger)ません」、「私にたかって下さい」などと、冗談口調で書いているのは面白い。一九三四年一月のもう一通の手紙で、

私は精を出して、この種のものとして完全無欠と思われる小説を書いています。骨が折れます。なぜなら、私は初めて、変人奇人でなく正常な人々を扱おうとしているからです。三十才になると、イギリス的滑稽さを狙った登場人物は易し過ぎます。^⑥

と述べている。その後の数通^⑦で、友人の犬を念頭において作品中の狎を描いたことと一八、五〇〇語書いたこと、毎週一〇、〇〇〇語進んでいること、三分の二書けて三週間後に仕上がりそうであることが述べられている。ここまでがフェズからである。三月と推定されるデヴォンからのA・D・ピーターズあて手紙^⑧では、まだ仕上げていないことがうかがえるが、題名は *A Handful of Ashes* であると告げられている。また(アメリカの雑誌に)分載するなら、ト

ニーが離婚を断わる場面の後に‘reconciliation’を描く一章を追加すると、「もう一つの結末」(Alternative Ending)について述べているが、売れ行きを考えてのようである。小説は英誌 *Vogue* と米誌 *Harper's Bazaar* に載せられた^⑨。後、一九三四年九月に出版された。ヘットン・アビーを描いた口絵について、絵心のあるウォーは、「私は建築家に、一八六〇年の建物としてできるだけひどいものをデザインするように指示した。彼はみごとにやったと思う」と、友人に書き送っている。^⑩

五

以上のように、ウォーのギアナブラジル旅行をたどると、『一握の塵』に取り入れられたと思われる経験を見出すことができ、彼の小説作法の一端が明らかになる。このうちポア・ヴィスタへの期待と幻滅の体験は、小説といま少し関わりを持っているように思われる。

ギアナブラジル旅行の目的は、皇帝の戴冠式を取材したアビシニア旅行の時のように明確でない。彼は旅行記の冒頭で、「遠い未開の土地、とくに、異なる文化・発展段階がぶつかり合う辺境地方には独特の魅力があり……」^⑪と述べているほかは、尋ねられて、「原始インディアンの

写真をとりた^③」と言ったことしか明らかにしていない。そして英領ギアナに到って初めて、ボア・ヴィスタへの夢を吹き込まれ、それは苦難の旅のうちに大きくふくらんだのである。ボア・ヴィスタへの期待と幻滅の体験は、偶然の産物であった。そして、ある程度、この偶然性は小説において受け継がれている。なぜなら、トニーははじめ、しばらくヘットンと離れたというだけの気持で旅に出ようと思ったのであり、クラブで旅行案内を見て、たまたま、メッシンジャー博士の眼にとまり、ブラジル奥地の都の伝説を聞かされ、「理想化されたヘットン」を夢見るようになるからである。作者は、強いて必然性を装おうとはしていない。

このように偶然性のある第五章「都を求めて」とそれ以後の部分が、英国を舞台とするそれまでの四章とうまくつながっているかについては、意見の分かれるところである。小説の出版直後、作者の友人ヘンリー・ヨーク（小説家ヘンリー・グリーン）は、結末があまりにもファンタスティックであることを中心とする批評の手紙^④を作者に書き送った。それに対しウォーは、トッド・エピソードは奇想であると述べ、作品全体を要約してこう書いている。

しかしアマゾンの部分はなくてはならなかった。大要は、ゴシック的な男が蛮人たち——まずビーヴァー夫人など、ついで本当の野蛮人たち、最後にヘットンの銀狐——の手に落ちるといふことなのだ。あの都の探求はすべて正当なシンボリズムだと思っている。^④

これは、言うまでもなく、短篇から小説が生まれたという後年に述べた事情を、作品の論理としてしかるべき順序で述べたもので、作者としては当然の言い分である。しかし彼は、この言葉と相容れないかのような「もう二つの結末」を残している。

『一握の塵』の第四章を読み終わると、ヘットンでのトニーのゴシック世界が崩れたところで、作品のエネルギーの放出が一段落した感がある。A whole gothic world had come to grief、という言葉こそこの小説が目ざしてきた到達点であり、物語はほとんど語られたと感じられ、次の展開への手掛りはつけてあるもの、さほど大きな展開があるはずだとは予想されないのではないだろうか。

第五章で作者は、文字どおりの形でトニーをゴシック世界の探求に乗り出させるとともに、ブレンダの窮乏を描き、トニーのロマンチズムの愚かさ、自己中心性を強調する。

第五、六章は、協奏曲などにおけるカデンツァと同じく、ウォーが技量を十分に發揮し、テーマの可能性を汲み尽くすためのものと私は考える。したがって何よりも芸術的効果が、その正当性の証しとならねばならない。第五章第一節は魅力に欠ける導入部であるが、ブレンダが貧窮し、トニーが譎妄状態のうちに幻の都に達したと信じる痛烈な第四節に至れば、作者の成功は誰の眼にも明らかであろう。読者は、「理想化されたヘットン」を求めるとトニーに、気乗りはしないものについて行くうちに、作者の力業を受け入れてしまうのである。

「もう一つの結末」は、第四章末、離婚するとしても財産分与をしないと宣言したことに見られる、トニーの不寛容な態度の延長線上にある。本来の結末における彼の苦難は、その不寛容の結果としてのブレンダの窮乏と交互に描かれ、もはや当然の自滅であると感じられる。したがって、「もう一つの結末」のように、妻のために借りていたフラットを自分のために彼女に黙って借り続けること自体は、彼の破滅と相容れないわけではない。それが、最終的に、譎妄状態でのトニーの倒錯した幻想に組み入れられていたらと想像するのは、楽しいことである。

『一握の塵』の主要部の到達点の感のある、A whole

Gothic world had come to grief¹ という表現が、ボア・ヴィスタでの幻滅の表現を移したものであることは興味深い。ボア・ヴィスタへの期待と幻滅の体験は、幻の都の探求のヒントになったのみでなく、もっと深いところでウォーの心性と響き合ったのではあるまいか。伝説の都の探求自体、存在し難い世界を求めると主人公の性格の比喩である「探求」ということを行為の次元で展開し、その absurdity を拡大したものである。そしてトニーの性格は、ウォーが『名譽の剣』(Sword of Honour)のガイ・クラウチバックについて述べた、「名譽についての古めかしい考えと騎士道の幻想」^②に發展するもので、作者の内面に由来している。ボア・ヴィスタへの期待と幻滅の体験は、理想と幻滅ともにひかれるウォー生来の心性を揺り動かす、一つの生の比喩と感じられるようになったのではないか、そしてそのことが、作者の離婚とあわせて、『一握の塵』そのものが生まれる基本的な背景であったのではないかと思うのである。

註

① A Handful of Dust (London: Chapman and Hall, 1934; new ed., 1964; rpt., London: Eyre Methuen, 1979). 新版には序文で「この『結末』が……」。

ネキントは新版。

- ⑧ 拙稿「ノーヴォリン・ウォーの *A Handful of Dust* に
つ」*Attila Review* 第十号（一九七二）。
- ⑨ *Ninety-Two Days, The Account of a Tropical Journey
Through British Guiana and Part of Brazil* (London:
Duckworth, 1934). ただし、引用は、これを抜粋した、*A
Journey to Brazil in 1932*、が、*When the Going
Was Good* (London: Duckworth, 1946) の、ネキント版（一
九五二）より行なう。なお、*When the Going Was Good* は、
土岐恒二氏により、吉田健一編『ノーヴォリン・ウォー』（新
栄社、一九六九）で紹介されている。
- ⑩ *The Diaries of Evelyn Waugh*, ed. Michael Davie (Lon-
don: Weidenfeld and Nicolson, 1976); *The Letters of
Evelyn Waugh*, ed. Mark Amory (London: Weidenfeld
and Nicolson, 1980); *The Essays, Article and Reviews of
Evelyn Waugh*, ed. Donat Gallagher (London: Methuen,
1983).
- ⑪ 'Globe-Trotting in 1930-31' in *When the Going was
Good*, Penguin Books, p. 185. 以下は *Remote People* の抜
粋の部分。一九三一年二月十九日の日記に友人のロンドンへ
の逸話を記してゐるが、それはウォーがロンドンへ帰つたこ
とを、*ノボリン* 船中へ聞きた話かと思ふ。
- ⑫ *Diaries*, p. 354.
- ⑬ *A Handful of Dust*, pp. 187-88.
- ⑭ 'To Henry Yorke', Sept. 1934, *Letters*, p. 88.
- ⑮ 十二月六日の日記では「ポルトガル人とインディアンの混
血のうら」*と*いふが、その後の手紙では「ブルギー人とイ
ンディアンの混血」*と*書きつゝゐる。'To Lady Mary Lygon',
26 Dec. 1932, *Letters*, p. 67.
- ⑯ 日記は、'Williams' *と*いふが、これは、訛りを写したのであ
らう。前記の手紙は、'Williams' *と*書きつゝゐる。
- ⑰ 'Journey', p. 191. 日記記入は翌二十三日。
- ⑱ 'Journey', p. 195.
- ⑲ 'Journey', pp. 204-05.
- ⑳ 'Journey', p. 210.
- ㉑ *A Handful of Dust*, p. 184.
- ㉒ 'Journey', pp. 217-21.
- ㉓ 彼は毎日曜日四〜五時間インディアンたちを説教する福音
宣教師であるが、三十年間一人を帰依者かなく。聖書をイ
キコーン語に翻訳中である。
- ㉔ 'Fan-Fare', *Life* (April 8, 1946), rpt. in *Essays, Arti-
cles and Reviews*, p. 303.
- ㉕ *A Handful of Dust*, p. 240.
- ㉖ 'To Henry Yorke', Sept. 1934, *Letters*, p. 88.
- ㉗ 作者自身、*A Handful of Dust*, my favourite hitherto,
dealt entirely with behaviour. It was humanist and
contained all I had to say about humanism. *ノボリン*
ゝ、'Fan-Fare', p. 304.

- ②① 'Journey,' p. 226.
 ②② 'Journey,' p. 229.
 ②③ *A Handful of Dust*, p. 173.
 ②④ 'Journey,' p. 229.
 ②⑤ Christopher Sykes, *Evelyn Waugh: A Biography* (Glasgow: Collins, 1975), p. 131.
 ②⑥ Sykes, p. 131.
 ②⑦ 'Fan-Fare'; Interview with Julian Jebb, April 1962, *Writers at Work, The Paris Review Interviews*, selected by Kay Dick, Penguin Books (1972); Preface (1963) to *A Handful of Dust*, new ed.
 ②⑧ 'Fan-Fare,' p. 303.
 ②⑨ 'To Lady Mary Lygon,' Oct. ? 1933 (Postcard), *Letters*, p. 81.
 ③① 'To Lady Mary and Lady Dorothy Lygon,' Jan. 1934,

Letters, p. 83.

- ③② 'To Lady Mary Lygon,' Oct. 1933 ? *Letters*, p. 81.
 ③③ 'To Katharine Asquith,' Jan. 1934, *Letters*, p. 84.
 ③④ *Letters*, pp. 84-85.
 ③⑤ 'To A. D. Peters,' March ? 1934, *Letters*, p. 87.
 ③⑥ Sykes, p. 138; *Letters*, p. 87.
 ③⑦ 'To Tom Driberg,' Sept. 1934, *Letters*, p. 88.
 ③⑧ 'Journey,' p. 187.
 ③⑨ 'Journey,' p. 192.
 ④① トミダリ Sykes, p. 142 & *Letters*, pp. 88-89 (譯者註) トミダリ
 ④② 'To Henry Yorke,' Sept. 1934, *Letters*, p. 88.
 ④③ Interview with Julian Jebb, p. 203.

(本学助教授 英文学)